

研究ノート

ドイツの企業と証券市場 ——40年間の研究過程と34年間の教育活動—— (通常専任, 最終講義)

山口 博 教

Hironori YAMAGUCHI

目次

1. はじめに—研究テーマとドイツ語学習
 2. 修士論文の作成
 3. 研究論文の作成と北星学園大学着任, 第一著作の刊行
 4. 経済学科から経営情報学科への異動と国外研修, 第二著作の刊行
 5. 全国証券ゼミナール大会への参加, 大学院(修士課程)担当, 同人誌加入及び現在の研究課題
 6. まとめ—新たな研究課題について
- 年譜ならびに主要著作目録
- ・教育歴
 - ・職歴
 - ・所属学会
 - ・関係団体
 - ・著作目録

[Abstract]

Big Business and Financial Markets in Germany: 40 Years of Research (The Last Lecture before Retirement as a Tenured Professor)

I studied corporation theories under Professor Kenji Tominomori and German Business History under Professor Hisashi Watanabe in the Faculty of Economics of Hokkaido University, Sapporo. I began my research at the school of economics of Hokkaido University, Sapporo and completed my thesis on the Corporation in the Federal Republic of Germany, based on the research of Professor Helge Pross' work published in 1965. During my research at the Free University of Berlin in 1979, under Professor Manfred Hein, I discovered that the banking system is very influential on business in Germany. This discovery led me to publish the book *Big Business and Banks in the Federal Republic of Germany* in Tokyo in 1988 as my PhD thesis. Through the support of Professor Oswald Hahn, at the Erlangen-Nürnberg University in 1991, I began to research the German stock exchanges. Later Professor Hartmut Schmidt at the Hamburg University guided my direction during our academic exchanges that led to the publication of my second work, *The Historical Development of German Stock Exchanges* in Sapporo in 2006.

1. はじめに—研究テーマとドイツ語学習

私が西ドイツ経済研究を志したのは、二人の指導教授から示唆を得たためでした。その一人は学部時代から指示した当時の富森虔児助教授(現北大名誉教授)と経営史を担当していた渡部尚助教授(現京都大学名誉教授)の薫陶によるものです。前者からは当時の札幌では情報入手に時間がかかるため、希望した日本経済を対象とすることは論外と論されました。北海道で研究し、本州勢に対抗できるのは経済原論か外国経済しかないというこ

とがその理由でした。そして私が履修した第二外国語がドイツ語であったため、ドイツ経済を選択することになりました。

次にドイツのどの時代を対象とするかについて、経営史の他に独語外書購読を担当していた渡辺助教授(当時)に相談して決めました。先生は私が学部4・5年と研究生を過ごした時期に、独語外書購読を3年間連続して担当していました。この科目を続けて受講していたからです。相談にいくと、「ワイマル時代は経済史と歴史研究者が多いので、産業革命(工業化)の時代か、戦後西ドイツはどうですか」とアドバイスをしてくれました。

キーワード：ドイツの企業と証券市場, ドイツでの研究活動, 著作概説

Keywords: Business and Stock Exchanges in Germany, Research in Germany, Survey of the Productions

以上、両氏の勧めにより戦後西ドイツ経済を研究対象とすることになった次第です。早速ドイツ語学習と修士論文作成の準備に取り掛かりました。しかし渡辺先生は1975年4月に京大へ異動しました。このため、藤女子大のドイツ人のリボリア教授を、藤女子高校の教諭をしていた従兄の伝手で紹介してもらいました。二週に一回同学園マリア院へ出かけ1年半、個人教授を受けました。

この時最初に言われたことは次の3点です。第一に、毎日5分でも独語を聴くこと、第二に、詩などの短文を暗記すること、第三に欧州人にとっても難しい独語習得には日本では30年を覚悟すること。その後博士課程に入り、北大独文科の塩谷饒教授(定年後、北星学園短大)の許可を得て、独文科の学部と大学院の授業に参加させてもらいました。

2. 修士論文の作成

修士論文のテーマは、現代資本主義が西ドイツでどう展開していくかを見ていくことでした。当時1960年代末から日米「株式会社の所有と支配」をめぐる論争が活発でした。宮崎義一(京大経済研究所)、奥村宏(日本証券経済大阪研究所)、三戸公(立教大)等の研究者が活発な議論を行っていました。この種の議論が当時の西ドイツでどのように取り扱われているか、これがテーマとなりました。

まず指導教授が取り寄せたギーセン大学ヘルゲ・プロス教授(Professor Helge Pross)の教授資格申請論文(Habilitationsschrift)、*Manager und Aktionäre in Deutschland. Untersuchungen zum Verhältnis von Eigentum und Verfügungsgewalt*, Frankfurt am Main 1965.の下翻訳を行いました。またプロス論文についての藻利重隆(一ツ橋大学)、前川恭一(同志社大学)、丑山優各氏の紹介と議論を整理しました。

併せてドイツの株式所有構造について以下

の資料をもとに調査を行いました。①「ドイツ500大企業(*Die Großen 500*, Neuwied am Rhein 1976.)」、②ベルリン自由大学マンフレート・ハイン教授(Professor Manfred Hein)の雑誌論文「銀行の勢力—今日までの議論の成果(*Macht der Banken—Folgerungen aus der bisherigen Diskussion*, *WSI-Mitteilungen* 1975.)」、③コメルツバンクが刊行する「企業の資本所有関係(*Wer gehört zu wem*, 1977.)」。

次に取り上げたのは企業金融の問題でした。いわゆるドイツの「自己金融」論です。この分野は資料があまりなく、また財務用語が難しいため理解するのに苦労しました。ただ金融論ゼミに属し、公認会計士を経験した先輩の女性研究者から厳しい批判やアドバイスを研究会で受けました。さらにドイツ企業における「経営者支配」現象を追求すべく、ドイツ企業に関する情報を収集しました。そして以上の結果をまとめて、修士論文「西ドイツ金融資本の蓄積構造—資本物化の進展に即して」を1977年1月に作成しました。

この論文の審査では、主に以下の点が問題として指摘されました。それは、19世紀の「金融資本」概念が戦後西ドイツ経済に当てはまるかどうか、というものです。しかしこの点については、当時の筆者に解明されていない問題点であり、この時点では返答ができず、研究課題として持ち越さなければなりませんでした。

3. 研究論文の作成と北星学園大学着任、第一著作の刊行

博士課程と北大経済学の研究助手時代には、修士論文の項目に沿って研究論文の作成を開始し、この4年間に論文3本と研究ノート1本を書きました。そして、1981年4月に北星学園大学に赴任しました。その時先輩の教員から「就職しても書き続けることが大事」

と言われ，最低1年1本を目標に書き進める努力を続けました。

研究論文は，修士論文で取り上げた各テーマを個別に追求したものです。1本目はプロス論文とこれをめぐる日本での議論の整理でした。株式が広範に分散した巨大株式会社では，私的所有が希薄化する現象が生じます。プロスはこれを「私的共同所有」と名付けると同時に，私的所有が完全に廃棄されたわけではないことから所有の「パラドックス」と記述していました。

2本目は西ドイツ株式会社の自己金融問題を取り上げた。しかしこの問題では十分納得のいく論文に仕上げることができず，研究ノートにとどめました。

なお前々から一度ドイツで資料収集を行い，併せてハイン教授を訪問することを考えていました。色々な条件が重なり，1979年3月から5月初めにかけてのドイツへ渡航しました。結婚して間もなくでしたが国家公務員をしていた女房の支援を受け，ベルリンの住居は北大教養部付のドイツ人講師宅を借りました。

ハイン教授には授業の合間にアポイントメントを取り，個人教授と指導を数回受けました。ドイツ独占委員（Monopolkommission）の資料「競争は可能（*Merh Wettbewerb ist möglich: Hauptgutachten 1973/75, Baden-Baden 1976*）」を手渡され，読んで質問するように指示されました。また学生の卒業論文の口頭諮問を聴講させてくれました。これは3人一組の学生に対し，教授が次々と質問し，学生が答える形で行われました。論文の水準は日本の修士論文に匹敵します。さらにゼミナール学生や院生と一緒に，ベルリンで開催されたドレスナーバンクの株主総会を見学する機会を与えてもらいました。このように短期の滞在でしたが，貴重な体験をすることができました。

なお，帰国後に金融制度についての西独

政府の専門委員会のゲスラー委員会（Geßler-Kommission）が，鑑定報告書『銀行構造委員会報告—金融経済の根本問題—（*Bericht der Studienkommission: Grundsatzfragen der Kreditwirtschaft, Frankfurt am Main 1979*）』を刊行したことを知り，教授に依頼しこれを送付してもらいました。これら二つの委員会報告書を入手しえたことが，この時の渡欧の最大の成果でした。特に後者は銀行の企業に対する影響力を総括的に扱っていて，両者とも日本の経済学会では未紹介であったからです。これを読み込み，論点ごとに整理しまとめる作業を行った結果，株式会社とユニバーサルバンクの所有・支配関係について，最新且つ詳細な分析結果を備えた論文を作成することができました。

この業績のためか，北星学園大学へ1981年に就職することができ，教壇に立ちました。最初の1年間の授業では，学生の顔を見ることもできず，何を講義しているか自分でもよくわからないうちに終わってしまいました。これは担当講義が専門の経済学ではなく，「経営学」と「経営管理論」であったためでもあります。ただし少人数教育のゼミは当初4年生2名，3年生3名から出発し，アメリカ経営史のテキストを利用し，自分の勉強にもなりました。

なおアメリカ経営学に触れるため，1982年3月の春休みを利用しアメリカ見学旅行に出かけました。当時旭日ダウケミカル（株）駐在員としてミシガン州ミッドランドに滞在していた従兄に連絡を取り，女房連れで寄らせてもらいました。その時にフォード博物館，シカゴの商品取引所（CBT）と商業取引所（CME）並びに産業博物館を見学しました。また第2次世界大戦中にアメリカが捕獲したドイツUボートの実物や金融システムについてのわかりやすい説明展示を見て感心したことを覚えています。さらにニューヨーク証券取引所（NYS），また首都ワシントンD.C.の

見学と駆け足旅行でした。

その後はユニバーサルバンクがドイツ経済と金融市場全体に対し与える影響力について、またドイツ企業の合併・資本集中、銀行自己資本問題等の問題を取り上げ、論文にまとめました。またこの間に、富森教授とその門下生で共著作『現代の巨大企業』を1985年に刊行しました。この執筆活動と並行して、第1作目となる単著作『ドイツの巨大企業と銀行—ユニバーサル・バンク・システム—』の刊行準備を行いました。この結果1988年に出版にこぎつくことができ、文眞堂から刊行しました。

さらにこの頃、二つの特筆すべきことがありました。国内外の研究集団・研究者との交流の広がりです。国内では立教大学経営学部の三戸公教授が伊豆で行っている研究会に呼ばれ、参加しました。また日本証券経済研究所・大阪研究所の研究会で奥村宏が主宰する研究会にも参加させてもらいました。

ドイツの研究者との交流では、日本証券経済研究所（東京）で開催された欧州資本市場研究会で、エアランゲン・ニュルンベルク大学銀行経営研究所のオズワルド・ハーン教授（Professor Oswald Hahn）の講演を聞きました。これが、1991年の国外研修後半の研修をハーン教授の研究室とするきっかけとなりました。また、1994年にはハーン教授を学術振興財団の基金を活用し、北星学園大の公開授業へ招聘することができました。「ドイツの銀行の支配力」というテーマで講演をお願いしました。また北大濱田教授の仲介により、北洋銀行の本店研修会で「ドイツのハウスバンク」というテーマで講演を行っていただきました。

4. 経済学科から経営情報学科への異動と国外研修、第二著作の刊行

1987年に北星学園大学経済学部へ経営情報

学科が開設され、この時私は経済学科を離れ、新学科へ異動しました。担当する「企業論」が文科省の定めるこの学科の必置科目であったからです。当学部の教員は二つの講義担当が義務付けられているため、「証券市場論」の科目を設置してもらい、担当することにしました。いずれも経済学と経営学の双方から接近することが可能です。これでやっと自分の専門分野にもとづく授業をすることができるようになりました。

また経営情報学科が完成年次を迎えたため、1991年に国外研修が認められ1年間の留学をすることができました。4月と10月にドイツ文化センター（Goethe Institut）ローテンブルク・オブ・デア・タウバーとプリーン・アム・キムゼーで、語学研修、5月～9月はベルリン自由大学ハイン教授の貨幣・銀行研究所で、また後半11月～3月までエアランゲン・ニュルンベルク大学ハーン教授の銀行経営研究所で研修を行いました。

この滞在時8月末に一時帰国をしましたが、その目的は立教大学大学院経済学研究科に申請した学位取得論文の審査（口頭試問）を受けるためでした。そして9月30日付で学位（経済学博士）が与えられました。この結果ニュルンベルク大学では、Prof. Dr. Yamaguchiという名前が張り出された研究室を利用することになりました。（ただ事前に北星学園大の事務局にこのことを申請していなかったため、事務手続きで多大の迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。）

なおこの留学中にはできる限り各地の取引所を訪問することを心がけました。この結果この分野で資料収集が進み、次の研究テーマとして「ドイツ証券市場史」を選択することにしました。

ベルリン証券取引所の歴史冊子（*Berliner Börse 1685-1985*, Berlin 1985.）は前回の渡独時に西ベルリン証券取引所を訪問し、入手済

みでした（『北星論集』に抄訳を掲載）。今回はハンブルク訪問時に、ハンブルク取引所が附設しているハンザ図書館で同取引所に関する著作を購入しました。これはウィルヘルム・ブッシュ博物館が刊行した『株価急騰と大暴落の狭間で—取引所と貨幣の戯画（*Zwischen Hausse und Baisse-Börse und Geld in Karikatur*, Hannover 1987.）』という書籍です。株式取引に関連する写真と戯画・風刺画が満載されています。またフランクフルト証券所訪問の際には、ベーリング（Bernd Baehring）の『フランクフルト証券所史（*Börsen-Zeiten—Frankfurt in vier Jahrhunderten zwischen Antwerpen, Wien, New York und Berlin, Frankfurt am Main* 1985.）』を手渡されました。またフランクフルト大学附属株式研究所でも諸資料を入手。さらにハーン教授の紹介で訪問したミュンヘン証券所でミュンヘン取引所史を譲り受け取りました。

このように、株式会社化する以前の各地域取引所は比較的のんびりした友好的な雰囲気があり、外国人の私にもいろいろな説明をしてくれました。（株式会社化して以降はビジネスライクでこの雰囲気はなくなりました。）

1992年に帰国し、フランクフルトの銀行史研究所がハンス・ポール教授（Professor Hans Pohl）編集で『ドイツ証券取引所史（*Deutsche Börsengeschichte*, Frankfurt am Main 1992.）』を刊行したことを知りました。直ちに送り寄せましたが、これは決定的に重要な学術研究書でした。銀行史に関する研究書はドイツでは多数刊行されていますが、証券所に関する大部で体系的な研究成果はこれが第二次世界大戦後初めてのことと思います。各取引所が刊行した歴史文書と比較し、細かな検討を加えることができるようになりました。さらに未入手のプレーメン、デュッセルドルフ、シュツットガルトの取引所には手紙で資料送付を依頼したところ、それぞれ

について書かれた冊子が送られてきました。シュツットガルト取引所からは冊子となった刊行物がないため、メールでその歴史記述の文書を添付して送付してくれました。ウィーン証券所については国内の図書館からコピーを取り寄せました。

その後ハイン教授の元に二度程短期滞在中で通いある時ドイツの大学に証券市場の専門家がいないか尋ねたところ、ハンブルク大学資本市場研究所のハルトムート・シュミット教授（Professor Hartmut Schmidt）を紹介してくれました。これは私のドイツ証券市場史研究で決定的な事柄でした。教授は当時ドイツ連邦制の証券取引所に関し現状分析を行っている数少ない研究者の一人であったからです。シュミット教授に日本の地域取引所の取引シェア等を説明した手紙を送り、接触を開始しました。幸いにも返事も行うことができ、その後金融自由化以降のドイツの資本市場の分析を中心に、長い研究交流が始められた次第です。特にゴットフリート・クライン（Gottfried Klein）の『ハンブルク取引所400年（*400 Jahre Hamburger Börse—Eine geschichtliche Darstellung*, Hamburg 1958.）』を譲渡してくれました。またハンブルク特別市文書館における同取引所の歴史文書（古書）を参照するよう指示され出かけて写筆してきました。このように市場史研究の面でも支援してもらいました。

以上のように資料収集を行いながら、まずベルリン証券市場史の分析とまとめに取り組みました。プロイセン政府により創設された王立の取引所で、ドイツ重化学工業を創出する役割を負っていました。これを牽引したのが個人銀行家とかれらが創出した株式銀行（預金業務と創業活動・投資業務を兼業する兼営銀行）でした。現代のユニバーサルバンクであり、19世紀末には非常に投機的な取引を展開していました。このためマックス・ウェーバーが参加した専門委員会の答申によ

り証券取引法が制定され、投機取引は規制を受けることとなりました。

このドイツ型の定期(先物)取引については、ケルン大学のフリードリッヒ・ウィルヘルム・ヘニング教授(Professor Friedlich Wilhelm Henning)の経営史研究論文「歴史からみる先物取引(Börsentermingeschäfte in historischer Sicht, *Bankhistorisches Archiv*, Beiheft 19, Frankfurt am Main 1991.)」があり、参考にしました。教授には1997年の渡独の際にお会いして、いろいろ話を聞かせてもらいました。

なおこの取引所は20世紀に入ると「中央資本市場」として取引所と位置づけられましたが、二度に渡る世界大戦では戦時国債発行業務が金融機関の中心的な業務となりました。戦時中には軍需融資の推進力となり、逆に株式市場が諸理由により抑圧されたからです。その結果金融市場は19世紀と比較すると大きく変貌しました。そしてこの変化は第二次世界大戦終了後の西ドイツ経済・金融体制に多大の影響を及ぼしました。この点では戦時統制経済をナチス政権に倣い遂行した日本の戦中・戦後初期の状況と似ています。

次にフランクフルト証券市場史に取り組みました。こちらは中世以来、商人中心の取引所で、しかも国際的債券業務が中心に置かれた市場でした。またロートシルト(英名ロスチャイルド、仏名ロッチルド)に代表される個人銀行家(Privatbankier)が活躍した市場でもあり、第2次世界大戦前には取引業者の3/4がユダヤ系であったといえます。なおこのような状況はベルリンを含め、欧州資本市場に共通する歴史的背景を持っていることが次第に見えてきました。

他方この作業をする中で、東西ドイツ統合とEU統合が進展していました。これに伴い、証券市場にも新たな波が押し寄せてきました。証券取引の電子化に伴い、取引所は株式会社化し市場統合が進んで行きました。

ところで第二次世界大戦がナチス体制の崩壊で終結し、戦後再建と経済復興に入っていました。この戦後改革は、日本のそれとはかなり性格が異なります。とりわけドイツを占領した連合軍4か国が別行動を取り、占領政策の統合が日本に比べ遅れました。最終的には米占領軍の政策が貫徹し、英仏両国はそれに合わせる形がとられました。しかし旧東独はまったく別の道をたどり、ドイツ統一は1990年まで待たなければなりませんでした。

また証券市場自体を見ても一大変化が生じました。中央資本市場の機能を持たされていたベルリン取引所は旧ソ連占領地区にあり破壊されていたからです。証券市場はフランクフルトをはじめとする他地域取引所との連合組織を形成しました。また株式市場は戦時金融体制で圧迫を受けすぐに回復することが難しく、債券市場を中心とした市場へ変貌しました。このため1990年以前の西ドイツの証券市場を、かつてフランクフルト取引所において19世紀後半まで隆盛を誇っていた伝統的な「連邦制債券市場」の復活ととらえることにしました。ただしこれまで取引所で中心的役割を果たしてきたユダヤ系の証券業者は、ナチスの反ユダヤ政策で排斥されていました。

他方、東西ドイツ統合後は別の変化が生じました。株式会社が増えるとともに、株式市場が急速に活発化したからです。地域証券取引所は再び統合の道へ進みました。またロートシルト家もフランクフルト支店を復活させています。

こうして第2著作をまとめる段階に入りました。本の表題は『ドイツ証券市場—諸地域取引所の歴史特性と統合過程—』としました。ドイツという名を出すために、この本の最後の章では、ハンブルクのハンザ取引所史を扱いました。ミュンヘンとブレーメン、デュッセルドルフ取引所史についての執筆も考えましたが、資料が不備なことが判明したため、残念ながら断念しました。

以上第2著作は構想を考え出したのが1991年頃で、2006年に刊行するまでに15年を要しました。この間ハンブルク大学資本市場研究所のシュミット教授の元へは何度か通い、研究交流を行いました。また2002年に北星学園大学で証券経済学会の全国大会を開催した時に、文科省の学術振興財団資金でシュミット教授を招聘することができました、「欧州の証券取引所」という特別テーマで講演を依頼し、実現しました。

5. 全国証券ゼミナール大会への参加，大学院（修士課程）担当，同人誌加入及び現在の研究課題

ここで話を教育活動に向けていきます。私のゼミナールでは1989年以来証券研究学生連盟が主催する全国大会へ参加しています。最初の2年間と国外研修期間に中断した後の1992年にはオブザーバーとして参加し、その後は本格的に論文参加に切り替えました。もっとも最初のうちは、ゼミ生内の有志による自主参加でした（自主ゼミ）。しかし後継者不足に直面したため、2002年度からは3年生を中心にゼミ生全員参加に切り替えました。2005年度に優秀チームに対する表彰制度が導入され、山口ゼミは2007年度に2チームが2013年度に1チームがブロック優秀賞を得ています。

さらに2012年度には、夏休み中の9月第2週目に千葉商科大学三田村ゼミと合同ゼミナールを開始しました。三田村先生の指導教授が、慶応大学を定年退職した私と専門が近い赤川元章先生で、彼が大学院生時代からの知り合いでした。就職が決まり、全国証券ゼミナール大会へ向けた準備のゼミという位置づけです。2013年度からはこれに札幌学院大学の玉山ゼミ、2015年度からは大阪経済大学の証券研究会が加わり、活発な議論が展開されるようになっていきます。

なお1990年代半ばまでクリスチャン・アカデミーセンター（白老町）等で行った集中ゼミ合宿を、小樽市朝里川温泉の貸別荘ウィンケルへと場所を替え継続しています（途中から大学互助会の提携施設）。他にも合宿や海水浴・キャンプ・スキー・焼肉パーティー等のレクリエーションはゼミの集団性と仲間意識を高めるために欠かせません。「よく学び、よく遊べ」です。証券経済学会では、旧制高校を体験した長老教授たちが「学問には厳しく、友情には厚く（熱く）」と言っていたことを思い出します。

ところで北星学園大学は2001年度に、大学院文学研究科と経済学研究科の修士課程を設置しました。（先行していた社会福祉研究科は博士課程をこの時に併設）。私も研究科委員のメンバーとなり授業をスタートしました。日本人と大連外国語学院日本語学院からの姉妹校入学者が半々でした。証券・金融論の専門授業とし、2年目の修士論文指導を担当しました。1998年度に交換教員で大連に半年滞在しましたので、この時の経験と人的交流がなお第2著作の刊行準備の中で、「ユダヤ系個人銀行家と証券取引業者」という問題がテーマとして浮上してきました。フランクフルトのみならず、欧州証券・金融業界で避けて通れない問題がおぼろげに見えてきたからです。とはいえ、これを学問として取り上げるのは難しい問題もありました。

というのは、ドイツ及び欧州ではユダヤ人に対する迫害の歴史があるからです。ナチス政権が「反ユダヤ主義（anti-Semitism）」を最大限利用し、ホロコースト引き起こしたことはドイツの金融系学会においては触れてほしくない問題で、当時是一種のタブーのようになっていることが分かってきました。

ただし東西ドイツ統合後、旧東ドイツと東欧から戦後賠償請求がなされ、雰囲気が変わりました。西ドイツで戦後一定の解決が行われていたはずの問題が復活したからです。そ

して痛烈な批判がドイツ国内のみならず、アメリカ合衆国内のユダヤ人協会からドイツとスイスの銀行業界へ向け発せられました。封印されていた旧社会主義国の諸資料を、新たに見ることができるようになったためです。戦時下の強制労働と中立国を経由したスイス諸銀行への「金転送」等の諸問題が再度大規模に取り上げられました。

このような社会情勢の下で、主として若手経済・経営史研究者が中心となり、1990年代後半から2005年前後にかけて議論が高揚しました。スイス政府は歴史検証委員会を設置し、研究を促進させました。またドイツの企業と銀行も社史や銀行史の見直しと着手に入りました。EU統合を機会に経済進出を狙っていた産業・金融界が一定の反省の姿勢を示さなければ、新しい経済領域でスムーズなビジネスを行いにいと判断したためです。この結果、新しい研究成果が続々と刊行されました。地獄の釜の蓋(ふた)が開けられたようです。

しかしこの研究は政治的な思惑も関わり、行き過ぎた批判も伴いました。このため一時期の熱意が冷めるとともに研究もやや下火となっています。一度は開いた蓋を、再び閉じようとする傾向も生じています。

日本へのこの問題の紹介は、社会学・文学分野で先行し、ナチズムとスイスの関係についても業績がすでに出ています。(田村光彰著『ナチス・ドイツの強制労働と戦後処理』社会評論社2006年、黒澤隆文編訳『中立国スイスとナチズム』京都大学出版会2010年等。)私は金融分野におけるドイツの研究成果も紹介するべきであると考え、新たな研究テーマとして取り組むことを決めました。欧州における歴史認識問題と捉えています。ただし複雑な政治が絡むため、慎重さが要求されることを覚悟した上で研究に着手しました。

丁度この頃、2002年2月2日午後2時を期して札幌で会合を開始した同人誌のグループが誕生しました。小岸昭館長はじめ北大独文

学科の定年退職教員を中心とする『ブレーメン館』です。発案者の小岸教授は北大独文科で助手を務めた後京大で教鞭を取り、定年退職後に札幌へ戻り2002年にこの会を立ち上げました。京都時代には「日本ユダヤ文化研究会」を神戸で発足させた一人です。

札幌でも同人誌刊行を目指す研究会を作り、映画「ショア」(クロズド・ランズマン監督)の自主上映会を組織していました。私もこの映画会参加をきっかけに入会しました。「ユダヤ系証券業者の『アーリア化』」というテーマでの報告を皮切りに、この研究会の活動に参加しています。小岸先生始め参加者の各メンバーからユダヤ文化等について多くの示唆を受け、学んでいます。経済・経営・金融分野におけるこの問題を取り上げるべく背中を押されました。なおこの同人誌は毎年テーマが設定され、各自が文章を書くことになっています。私はこのテーマに沿い、または自分の生活経験にもとづいて選んだテーマで、随筆を書くようにしています。

以上のことを背景にして、現在「ナチス政権に対するドイツ銀行業界の対応と戦時業務」という課題に取り組んでいます。プリンストン大学のハロルド・ジェイムズ(Harold James)教授が書いたドイチェバンクとアプス重役の戦時下の銀行業務、またこれに反論を加えたフランクフルト大学の歴史学者、ロタール・ガル(Lothar Gall)教授の著作の紹介を『北星論集』誌上で行いました。着手したのが2007年で、今年(2015年)3月にも1本論文を書きました。このテーマに取り組み始めてから、すでに8年かかっています。

これでまとめようかとも思っていました。ドレスナーバンクの戦時業務と比較する必要が出てきました。このため今後同行が刊行した『「第3帝国」下のドレスナーバンク(Die Dresdner Bank im Dritten Reich, München 2006.)』の紹介論文を作成しようと考えています。このためには戦後のニュルンベルク裁

判（本裁判と継続裁判）結果，ナチス親衛隊（武装SS）と銀行との関係などさらに調査しなければならなくなりました。他にもコメルツバンクやアリアンツ保険会社の関連本もドイツでは出版済みで，これらをどう取り扱うかも考慮しています。

なお本年4月からは嘱託の特別専任教員となりますが，完全定年の2020年3月までには何とか第3著作として刊行したいと準備しています。

6. まとめ—新たな研究課題について

最後に全証ゼミで5年前からテーマとなっている「金融教育」のテーマに触れておきます。

高齢化社会や年金問題が浮上する中で，老後の人生設計の経済基盤を確保することが重要な政策課題となってきました。消費者金融分野の債務過剰問題や振り込み詐欺等の証券・金融詐欺にも関係する問題です。英語圏社会が早くから取り組んできましたが，日本でもその必要性が緊急に増してきています。

研究成果としては英語圏の紹介論文が多く，大陸欧州やアジア関係のものが非常に少ないことは他の経営経済学テーマと同様です。このためドイツにおける分野の展開に注意を払ってきました。1992年夏の渡独の際にハンブルク大学のシュミット教授に相談したところ，ドイチェバンクのハンブルク支店とハンブルク貯蓄銀行でインタビューをセットしてくれました。これを契機としてハンブルクを中心とする活動を推進してきたハンブルク大学ウド・ライフナー教授（Prof. Udo Reifner）の存在を知りました。そして教授が創設した金融業務研究所ifffとそのプロジェクトについての論文をこの研究所から送ってもらい，これを紹介しました。

他のテーマとしてはスイスの証券市場史を考えています。資料は三大証取所（チューリッ

ヒ，バーゼル，ゲンフ（ジュネーブ）の歴史文書等を入手済みです。そのうち分析してみようと思いますが，フランス語が混じっています。このため65歳からの新たな外国語の手習いを合わせて行うつもりです。

最後になりましたが，これまで研究交流をしてきた学内外，国内外研究者の皆様との研鑽に感謝します。また研究・教育活動を支援し続けていただいた北星学園大学の事・用務職員の皆様方に対し厚く御礼申し上げます。また本日お忙しい中，聴講に駆けつけてくれたゼミ卒業生の皆様ありがとうございました。

なお在校生には今後5年間，これまでの講義とゼミナールを特別専任教授として引き続き担当することをお伝えしておきます。

以上は2015年1月19日に，北星学園大学A館707教室で行われた「現代企業論」での通常専任退職記念，最終講義「ドイツ企業・証券市場研究の40年」の原稿をもとにしている。ただし2014年12月19日から2015年1月16日までの約4週間，椎間板ヘルニア手術とリハビリのため入院を余儀なくされ，原稿作成が大幅に遅れた。このため本稿は最終講義の原稿に修正を加えたうえに，大幅に加筆していることをお断りしておきたい。

年譜ならびに主要著作目録

1950年2月12日 東京都新宿区戸山町（日赤病院）で生まれる。

教育歴

1956年4月 札幌幌西小学校入学
1962年3月 同校卒業
1962年4月 札幌啓明中学入学
1965年3月 同校卒業
1965年4月 札幌旭丘高等学校入学
1968年3月 同校卒業
1969年4月 北海道大学文類入学

- 1971年 4 月 同大学経済学部進学
 1974年 3 月 同学部卒業, 経済学士
 1975年 4 月 北海道大学大学院経済学研究科
 入学 (経済政策専攻, 指導教授:
 富森虔児)
 1977年 3 月 同課程修了, 経済学修士
 1977年 4 月 同研究科博士課程進学
 1979年 3 月～5 月
 ベルリン自由大学銀行・貨幣研
 究所 (Prof. Manfred Hein) 短
 期私費留学
 1980年 3 月 前掲大学院博士課程単位取得退
 学
 1991年 9 月 経済学博士 (立教大学)
- 職歴**
- 1980年 3 月 北海道大学経済学部研究助手
 1981年 3 月 同職退職
 1981年 4 月 北星学園大学経済学部専任講師
 1984年 4 月 同学部経済学科助教授
 1987年 7 月 同学部経営情報学科助教授
 1991年 4 月 同学部教授
 1991年 4 月 語学研修(ドイツ文化センター,
 ローテンブルク・オブ・デア・
 タウバー)
 1991年 5 月～9 月
 ベルリン自由大学銀行・貨幣研
 究所 (Prof. Manfred Hein) 客
 員研究員
 1991年10月 語学研修(ドイツ文化センター,
 プリーン・アム・キムゼー)
 1991年11月～1992年 3 月
 エアランゲン・ニュルンベル
 ク大学銀行経営研究所 (Prof.
 Oswald Hahn) 客員教授
 1998年 2 月～8 月
 交流教授 (大連外国語学院日本
 語学院)
 2001年 4 月 北星学園大学経済学研究科教授
 2009年9月～2010年 3 月
- 研究専念休暇 (ハンブルク
 大学資本市場研究所 (Prof.
 Hartmut Schmit) 客員教授)
 2015年 3 月 北星学園大学経済学部通常専任
 退職
 2015年 4 月 北星学園大学経済学部特別専任
 教授 (嘱託)
- 非常勤講師**
- 札幌学院大学, 札幌大学, 北海学園大学,
 小樽商科大学, 釧路公立大学
- 所属学会・研究会**
- ・証券経済学会 (1977年～, 1998年～1999年
 幹事, 1999年～2009及び2013年～理事)
 - ・信用理論研究学会 (1980年～, 2014年～理
 事)
 - ・日本金融学会 (1985年～)
 - ・経営史学会 (1978年～)
 - ・日本経営学会 (1981年～2015年)
 - ・経済理論学会 (1983年～2015年)
 - ・ドイツ資本主義研究会 (1990年～)
 - ・ドイツ経営研究会 (1995～2015年)
 - ・唯物論研究会 (1995年～2015年)
 - ・日本EU学会 (2002年～2015年)
 - ・European Capital Markets Institut (2003
 ～2015)
- 関係団体**
- ・小樽絵本・児童文化研究センター (1989年
 ～, 1990年～理事)
 - ・同人誌『プレーメン館』(2012年～, 企画
 部員2006年～)
 - ・金融経済教育を推進する研究会 (日本証券
 業協会主催, 金融専門家委員, 2013年～)
- 著作目録**
- I. 著書
1. 『現代の巨大企業—国際比較の視点から
 —』新評論, 1985年10月 (富森虔児編著,

- 第5章「西ドイツ—巨大企業と銀行—」を分担），151～185ページ
- 『西ドイツの巨大企業と銀行—ユニバーサル・バンク・システム—』文眞堂，1988年9月（立教大学経済学博士，学位取得論文），255ページ
 - 『証券・金融市場の新たなる展開—杉江雅彦教授古希記念論文集』晃洋書房，2002年10月（杉江雅彦教授古希記念論文集編集委員会編集，第3章「ハンブルク証券市場の歴史特性—ハンザ取引所の一翼として—」を分担），33～45ページ
 - 『ドイツ証券市場史—取引所の地域特性と統合過程—』北海道大学出版会，2006年3月，298ページ
- ## II. 論文，研究ノート，紹介，翻訳・抄訳
- 「西ドイツ巨大企業における企業・法人株主と被雇用経営者—銀行の企業支配との関連で—」『経済学研究』（北海道大学—以下略）第28巻第3号，1978年8月，195～245ページ
 - 研究ノート「西ドイツ株式会社における企業金融—資本集中・銀行合併との関連で—」『経済学研究』第29巻第4号，1979年11月，127～182ページ
 - 「1970年代西ドイツにおける銀行論争—ユニバーサルバンクの勢力をめぐって—（上）」『経済学研究』第30巻第3号，1980年11月，307～322ページ
 - 「西ドイツにおける銀行と産業の関係—二つの委員会の調査と分析—」『証券経済』第135号，1981年4月，103～131ページ
 - 「1970年代西ドイツにおける銀行論争—ユニバーサルバンクの勢力をめぐって—（下）」『経済学研究』第31巻1号，1981年6月，153～185ページ
 - 「1970年代にドイツにおける銀行論争—ユニバーサルバンクの勢力と信用制度改革—」『北星論集』（北星学園大学経済学部—以下略）第19号，1982年3月，169～190ページ
 - 研究ノート「西ドイツ金融機関の銀行自己資本問題—第3次信用制度法改正をめぐる諸論争—」『北星論集』第21号，1984年3月，167～198ページ
 - 「西ドイツにおける銀行自己資本問題—信用ピラミッドの形成を中心として—」『金融経済』第213号，1985年8月，39～75ページ
 - 「西ドイツにおける企業集中と独占委員会」『北星論集』第25号，1988年3月，25～70ページ
 - 研究ノート「西ドイツにおける全面的（総合）金融サービス業務」『北星論集』第27号，1990年3月，285～318ページ
 - Grossunternehmen und Bankensystem in der Bundesrepublik Deutschland und Japan—Eine Vergleichende Analyse, in: Hokusei Review, Vol.28, 3, Sapporo. 1991, p.71～84.*
 - 紹介「Berliner Börse, Berliner Börse 1685-1985, Berlin 1985」『北星論集』第30号，1993年3月，181～200ページ
 - 「中央資本市場としてのベルリン証券取引所—生成から崩壊への過程—（1）」『北星論集』第32号，1995年5月，1～31ページ
 - 「中央資本市場としてのベルリン証券取引所—生成から崩壊への過程—（2）」『北星論集』第33号，1996年3月，99～130ページ，99～130ページ
 - 「中央資本市場としてのベルリン証券取引所—生成から崩壊への過程—（3）」『北星論集』第34号，1997年3月，1～34ページ
 - 「統合資本市場としてのドイツ取引所株式会社—取引の電子化に伴う複合システムの導入—」『証券経済研究』第11号，

- 1998年1月, 57~72ページ
16. 「ドイツの証券市場—諸地域取引所の歴史特性—」『証券経済研究』第27号, 2000年9月, 117~131ページ
 17. 「国際債券市場としてのフランクフルト証券取引所—生成・展開過程と歴史特性—」『北星論集』第39号, 2001年3月, 53~73ページ
 18. 「西ドイツの連邦制資本市場—4カ国占領とフランクフルト金融市場の復活—(上)」『北星論集』第43巻第2号, 2004年3月, 39~62ページ
 19. 「西ドイツの連邦制資本市場—4カ国占領とフランクフルト金融市場の復活—(下)」『北星論集』第44巻1号, 2004年9月, 21~44ページ
 20. 紹介「ユダヤ人資産の『アーリア化』に関する研究の進展—ハロルド・ジェイムズの『アーリア化』関連第二著作を中心として—(1)」『北星論集』第47巻第2号, 2008年3月, 157~175ページ
 21. 紹介「ユダヤ人資産の『アーリア化』に関する研究の進展—ハロルド・ジェイムズの『アーリア化』関連第二著作を中心として—(2)」『北星論集』第48巻第1号, 2008年9月, 91~111ページ
 22. 紹介「ユダヤ人資産の『アーリア化』に関する研究の進展—ハロルド・ジェイムズの『アーリア化』関連第二著作を中心として—(3)」『北星論集』第48巻第2号, 2009年3月, 97~121ページ
 23. 研究ノート「ドイツにおける株式取引の『内部化』—MiFIDによる規制との関連で—」『北星論集』第50巻第2号, 2011年3月, 37~56ページ
 24. 「L.ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像—諸アプス批判への反論の基本視点—(1)」『北星論集』第52巻第1号, 2012年9月, 17~38ページ
 25. 「L.ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像—諸アプス批判への反論の基本視点—(2)」『北星論集』第52巻第2号, 2013年3月, 1~18ページ
 26. 紹介「ドイツの学校における金融教育—ハンブルクにおける『生徒の銀行』の紹介」『北星論集』第53巻第1号, 2013年9月, 149~154ページ
 27. 「L.ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像—諸アプス批判への反論の基本視点—(3)」『北星論集』第53巻第2号, 2014年3月, 51~73ページ
 28. 「ドイツにおける消費者保護を目指す金融教育—U.ライフナーとiffのプロジェクト—」『証券経済研究』第88巻, 2014年12月, 97~108ページ
 29. 「L.ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像—諸アプス批判への反論の基本視点—(4)」『北星論集』第54巻第2号, 2015年3月, 21~39ページ
- Ⅲ. 報告, 資料紹介, 書評, 翻訳, 報告に対するコメント, 学会主催・司会
1. 報告「西ドイツのユニバーサル・バンク・システム—1970年代における論点をめぐって—」(証券経済学会第17回全国大会, 神戸大学1980年8月), 『証券経済学会年報』第16号, 1981年5月, 27~37ページ
 2. 報告「西ドイツにおける銀行自己資本問題—銀行法改正との関連で—」(日本証券経済学会第24回全国大会, 西南学院大学1985年11月), 『証券経済学会年報』第21号, 1886年5月, 188~199ページ
 3. 報告「西ドイツ, ユニバーサルバンクの業務と勢力—銀行論争の争点と帰結—」(信用理論研究会1986年度春季大会, 中央大学1986年5月), 『信用理論研究』第4号, 1987年10月, 24~33ページ
 4. 抄訳「Ulrich Jürgens/Gudrun Lindner, *Zur Function und Macht der Banken*, Berlin

- 1974（ウルリッヒユルゲンス/グドルン・リンドナー『銀行の機能と勢力』、『北星論集』第23号，1986年3月，149～184ページ）
5. 書評「ミハエル・ゲルハルツ著『西ドイツの産業資本と銀行』（飯田裕康監修・相沢幸悦訳，重紀1985年）」『証券経済』第156号，1986年6月，186～194ページ
 6. 書評「相沢幸悦著『西ドイツの金融市場と構造』（東洋経済新報社1988年）」『証券経済』第167号，1989年3月，156～164ページ
 7. 報告「西ドイツの銀行と金融市場——全面的金融サービスの業務提供競争——」（金融学会1989年春季大会，明治大学1989年5月）『金融学会報告』第70号，1990年5月，116～122ページ
 8. 資料紹介「西ドイツにおける金融サービス業務（上）」『証券資料』第109号，1990年5月，55～67ページ
 9. 資料紹介「西ドイツにおける金融サービス業務（下）」『証券資料』第111号，1990年9月，40～60ページ
 10. 書評「H.O.エグラウ著『ドイツ企業の素顔』（長尾秀樹訳，東洋経済新報社1990年12月），『金融財政事情』1991年3月4日，70ページ
 11. 報告「西ドイツにおける全面的（総合）金融サービス業務」（証券経済学会北海道部会，1989年1月）『証券経済学会年報』第25巻，1990年5月，172ページ（記事）
 12. 報告「ドイツ証券取引所の盛衰をめぐって—'91年度国外研修報告—」（証券経済学会北海道部会，1992年9月）及び「ドイツ証券取引所の盛衰の諸問題—ベルリンとフランクフルト市場を中心として—」（日本証券経済研究所ヨーロッパ資本市場研究会，東京証券会館1993年3月）『証券経済学会年報』第28号，1993年3月，217ページ（記事）
 13. 報告「ドイツの消費者協同組合とCoopAGの破産問題」（第7回札幌Coop研究会，1993年8月，北海道大学農学部）
 14. 書評「相沢幸悦著『現代ドイツの金融システム』（東洋経済新報社1993年6月），『証券経済』第186号，1993年12月，179～187ページ
 15. 報告「中央資本市場としてのベルリン証券取引所—歴史的意義と限界—」（証券経済学会第42回全国大会，北海道大学1994年10月）『証券経済学会年報』第30号，1995年5月，213～221ページ
 16. 報告「中央資本市場としてのベルリン証券取引所—生成から崩壊への過程—」（ドイツ資本主義研究会（第2次），第34回例会，専修大学1994年12月）『ドイツ資本主義研究科会報』
 17. 研究者招聘，ベルリン自由大学金融経済研究所，マンフレッド・ハイン（Prof. Manfred Hein）「北星学園大学経済学科公開講座」，「北海道拓殖銀行講演」（文部省学術振興財団資金で招聘），1995年10月
 18. 翻訳「ドイツにおけるハウスバンク」（Manfred Hein, *Hausbank-Prinzip in Deutschland*, 北星学園大学経済学部公開講座の原稿）『北星論集』第33号，1996年3月，343～366ページ
 19. 学会主催（信用理論研究会1997年度秋季大会，北星学園大学，1997年11月）『信用理論研究』第16号，1998年5月，90～91ページ（記事）
 20. 報告「ドイツ取引所株式会社の成立と展開—複合的電子取引システムをめぐって—」（証券経済学会第48回全国大会，流通科学大学，1997年11月）『証券経済学会年報』第33号，1998年5月，100～103ページ
 21. 報告「フランクフルト証券取引所の生成過程と歴史特性」（経営史学会北海道ワー

- クショップ, 札幌大学, 2000年9月)
22. 報告「国際債券市場としてのフランクフルト証券取引所—生成過程と歴史特性—」(経営史学会第36回大会, 成城大学 2000年9月), 『経営史学』第36巻第1号, 105ページ(記事)
 23. 報告「ドイツの証券市場」(ドイツ経営研究会, 専修大学, 2001年4月)
 24. 書評「居城弘著『ドイツ金融史研究』(ミネルヴァ書房2001年2月)」『社会 経済史学』第67巻第4号, 2001年11月, 116～117ページ
 25. 岩田健治報告「EU金融・通貨統合と信用理論」に対するコメント(信用理論研究会2001年秋季大会, 福島大学, 2001年10月)統一テーマ「現代金融と信用理論の展望」『信用理論研究』第20号, 111ページ(記事)
 26. 「ドイツの諸地域取引所の伝統と最近の動向」(金融学会・信用理論学会北海道合同部会, 小樽商科大学札幌サテライト 2002年8月)『金融経済研究』第19号, 2003年3月, 125ページ(記事)
 27. 「ハンブルク証券取引所の伝統と組織改革—地域取引所とガバナンス—」(日本経営学会第76回全国大会, 明治大学, 2002年9月), 『経営学論集73集』, 2002年9月, 152～153ページ
 28. 学会主催(野口昌良助教授と, 証券経済学会第58回全国大会, 北星学園大学, 2002年11月)『証券経済学会年報』第38号, 2008年5月, 230～232ページ(記事)
 29. 研究者招聘, ハンブルク大学資本市場研究所シュミット教授, 「証券経済学会第58回全国大会, 2002年11月, 北星学園大学」(文部省学術振興財団資金で招聘による特別講演「欧州における証券取引所の統合」), 『証券経済学会年報』第38号, 2008年5月, 230～232ページ(記事)
 30. 報告「ドイツにおけるユダヤ系銀行業者—アンティ・セミティズムによる追放と戦後の復活—」(『ブレーメン館』第2回研究会, ホテルノースコート札幌, 2003年2月)「ドイツにおける証券取引所と証券業者についての見聞録」, 『ブレーメン館』第2号, 2004年6月, 113～118ページ
 31. 山村延朗報告「ドイツの証券監視制度」へのコメント(日本証券経済学会第59回全国大会, 神奈川大学, 2003年6月)『証券経済学会年報』第39号, 2004年5月, 227ページ(記事)
 32. 報告「ドイツの『連邦制資本市場』と証券取引の内部化」(金融庁金融センター・資本市場ワークショップ, 中央合同庁舎4号館, 2004年1月)
 33. 司会「シンポジウム—金融再生と証券市場(2)—EUの金融再生と証券市場—」(証券経済学会第61回全国大会, 埼玉大学, 2004年6月)『証券経済学会年報』第40号, 323ページ(記事)
 34. 報告「4カ国占領とフランクフルト金融市場の復活過程」(証券経済学会/経済理論学会北海道合同部会, 北海学園大学, 2004年7月)
 35. 報告「ナチス期の戦時金融体制についての覚え書き」『ブレーメン館』(2005年研究会, 北海道情報大学札幌サテライト, 2005年1月)『ブレーメン館』第3号, 2005年6月, 131～136ページ
 36. 報告「ユダヤ人資産の『アーリア化』をめぐる研究動向の中間報告」(『ブレーメン館』2006年度第7回研究会, 北星学園大学, 2006年1月)
 37. 報告「ドイツ証券取引所史—取引所の歴史特性と統合過程—」(日本証券研究経済所株式市場研究会, 東京証券会館, 2006年5月)
 38. 報告「4カ国占領とフランクフルト金融市場の復活」(日本金融学会2006年度秋

- 季大会，小樽商科大学，2006年9月）『金融経済』第24号，2007年3月，122ページ（記事）
39. 三田村智報告「ドイツにおけるベンチャー企業と資本市場問題—」に対するコメント（証券経済学会第66回全国大会，名城大学，2006年9月）『証券経済学会年報』第42号，315ページ（記事）
40. 報告「組織犯罪集団の経済・金融活動」（京都大学大学院法学研究科，科研費補助基盤研究（c）研究会，京都大学法学部，2009年1月）
41. 報告「ドイツ銀行業界とユダヤ人資産の『アリア化』」（日本金融学会/証券経済学会北海道合同部会，北星学園大学，2009年3月）『証券経済学会年報』第44号，2009年7月，256～257ページ
42. 報告「欧州統合へ向けた人々の歩みと営み」（『プレーメン館』2010年度研究会，北海道情報大学札幌サテライト，2010年7月）
43. 報告「サバティカル期間中の資料収集と欧州経済状況調査」（北星学園大学経済学部セミナー，北星学園大学，2010年11月）
44. 報告「ドイツにおける株式取引の『内部化』—MiFIDによる規制と市場間競争—」（日本証券経済研究所，株式市場研究会，東京証券会館，2011年9月）
45. 共同司会（相沢幸悦と）「ユーロ危機と証券市場」（証券経済学会第77回全国大会統一テーマ，関東学院大学，2012年6月）『日本証券経済学会年報』第48号，2013年7月，200～201ページ
46. 講演「日本経済とアベノミクス」（札幌豊平9条の会2013年例会，豊平区民センター，2013年9月）
47. 報告「経済多極化とグローバル化の相克—アベノミクスに潜む落とし穴—」（『プレーメン館』2014年度研究会，北海道情報大学札幌サテライト，2014年2月）
48. 報告「ナチズム下のドイツ銀行業界—ドイツチェバンク（DB）批判に対するL.ガルの反論—」（経営史学会北海道ワークショップ・証券経済学会北海道部会合同研究会，北星学園大学2015年7月）
49. 報告「ハンブルクの学校における金融教育の事例」（証券経済学会第84回秋季全国大会，山口大学，2015年11月），『証券経済学会年報』第50号別冊，2016年2月，2-10-1～2-10-5
50. 報告「ナチズム下のドイツ銀行業界—歴史認識をめぐる論争」（日本金融学会歴史部会，麗澤大学東京研究センター，2015年11月）
- IV. 随筆，講演，辞典項目，依頼原稿，依頼調査，指導講師
1. 講演「経済発展と証券市場—個人株主と法人株主の諸問題—」（北星学園大学第9回公開講座『経済発展の諸要因』1983年10月，北星学園大学）『公開講座資料』1983年10月
2. 講義「ドイツの経済と社会」（札幌市教育委員会第144回成人学校，1985年5月，
3. 講義「経営学」（矯正研修所札幌支所中等科研修，矯正研修所札幌支所，1985年9月）
4. 講演「カード社会と情報」（北星学園大学第16回公開講座『90年代の金融・流通・サービス』1990年10月，北星学園大学）『公開講座資料』
5. 講義「金融市場とカード社会」（プロミス北海道支社新人研修，1990年11月）
6. 講演「証券市場と地域経済—札幌証券取引所 vs 福岡証券取引所」（北星学園大学第22回公開講座『インターネット時代の経営学—暮らしがかわる・社会が分かる—』1996年10月，北星学園大学）『公開

- 講座資料』
7. 依頼原稿「姉妹校一北星学園大学」札幌市教育委員会文化資料室編『札幌文庫』85ページ, 1998年6月
 8. 「まえがき」執筆(蘇君業『大学日語視听』大連出版社1998年9月), 1ページ
 9. 辞典項目「証券市場(戦後ドイツ)」金融辞典編集委員会(深町郁彌・西村閑也・小野英祐・吉田暁編集代表)『大月金融辞典』(大月書店)2002年3月, 293~294ページ
 10. 講演「資産運用のための留意点—『投資家保護』と自己責任—」(北星学園大学第30回公開講座『どうなる? どうする? あなたの年金—年金改革と賢い人生設計—』北星学園大学, 2004年10月)『公開講座資料』
 11. 指導講師『年金制度はどうかわるべきか』(証券研究学生連盟平成16年度全国証券研究学生ゼミナール大会分科会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2004年12月)『講評』
 12. 調査報告『「仕組債」とはどんな証券か』(学校法人北星学園理事会財務委員会, 北星学園大学, 2004年12月)
 13. 講演「経済・金融教育の意義について」(東京証券取引所・札幌証券取引所共催『経済・金融教育フォーラム in 札幌』札幌証券取引所, 2006年3月)
 14. 随筆「父の死と延命治療についての考察」『ブレーメン館』第4号, 2006年6月, 13~17ページ
 15. 随筆「1950年代の戸山ハイットと伏見・円山地域の追憶」『ブレーメン館』第5号, 2007年6月, 131~136ページ
 16. 指導講師『日本におけるM&Aのあり方』(証券研究学生連盟平成19年度全国証券研究学生ゼミナール大会分科会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2007年12月), 『講評』
 17. 随筆「銀幕に見る映画と人生と経済社会」『ブレーメン館』第6号(特集「映画と私」), 2008年6月, 101~111ページ
 18. 随筆「蝦夷島探検紀行—松前藩史と東北学との関係で—」『ブレーメン館』第7号, 2009年6月, 134~139ページ
 19. 随筆「ベルリンとボーンマスでの語学研修—欧州語学学校で感じたこと」『ブレーメン館』第8号, 2010年6月, 65~71ページ
 20. 随筆「シュプレー河畔とボーンマス河口でのホームステイ—滞在先家族の多様性—」『ブレーメン館』第8号(特集「川と私」), 2010年6月, 126~133ページ
 21. 随筆「欧州における児童文化との接触」『ブレーメン館』第9号, 2011年6月, 51~59ページ
 22. 随筆「新宿『箱根山』と戸山ハイット」『ブレーメン館』第9号, (特集「山と私」), 2011年6月, 133~140ページ
 23. 随筆「母(トミ)の自伝的記述にみる戦前の大家族制・多子家庭」『ブレーメン館』第10号, 2012年7月, 37~47ページ
 24. 依頼原稿「ドイツ証券市場にみる取引所統合失敗の教訓」(巻頭言「談論」), 旬刊『経理情報』(中央経済社)第1318号, 2012年7月, 1ページ
 25. 指導講師「日本の証券市場の活性化について」(千葉商大三田村ゼミ・北星学園大山口ゼミの夏季合同ゼミナール, 北星学園大学, 2012年9月)
 26. 指導講師「日本における今後のM&Aのあり方について」(証券研究学生連盟平成24年度全国証券研究学生ゼミナール大会分科会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2012年12月)『講評』
 27. 指導講師「日本の金融教育の在り方」(千葉商大三田村ゼミ・札幌学院大学玉山ゼミ・北星学園大山口ゼミとの夏季合同ゼミナール, 北星学園大学, 2013年9月)

28. 指導講師「今後必要な金融リテラシー」（証券研究学生連盟平成25年度全国証券研究学生ゼミナール大会分科会，国立オリンピック記念青少年総合センター，2013年12月）『講評』
29. 随筆「還暦クラス会と小学校時代の回想——なぜいじめはなかったのか——」『プレーメン館』第12号，2014年6月，30～44ページ
30. 指導講師「金融リテラシーと年金問題」（千葉商大三田村ゼミ・札幌学院大学玉山ゼミ・北星学園大山口ゼミとの夏季合同ゼミナール，北星学園大学，2014年9月）
31. 随筆「年末・年始の入院と腰痛治療——六五歳直前，4週間の闘病記——」『プレーメン館』第13号，2015年6月
32. 通常専任教員退職，最終記念講義「ドイツの株式会社と証券市場——40年間の研究活動と34年間の授業を振り返って——」北星学園大学，2015年1月（『北星論集』第55巻第2号，2016年3月掲載予定）
33. 指導講師「今後必要な金融リテラシーについて」（証券研究学生連盟平成27年度全国証券研究学生ゼミナール大会分科会，国立オリンピック記念青少年総合センター，2015年12月）『講評』

#他に北星学園大学スミス・ミッションセンター（旧宗教部）編『卒業生へ送る言葉』1982年～2014年3月（2015年廃刊），その他学内広報誌への寄稿文等がある。これらは省略した。

